



2014年度 第3回
一橋大学政策フォーラム

日本の輸出と 経常収支の動向 の概観

2015年3月5日

祝迫得夫

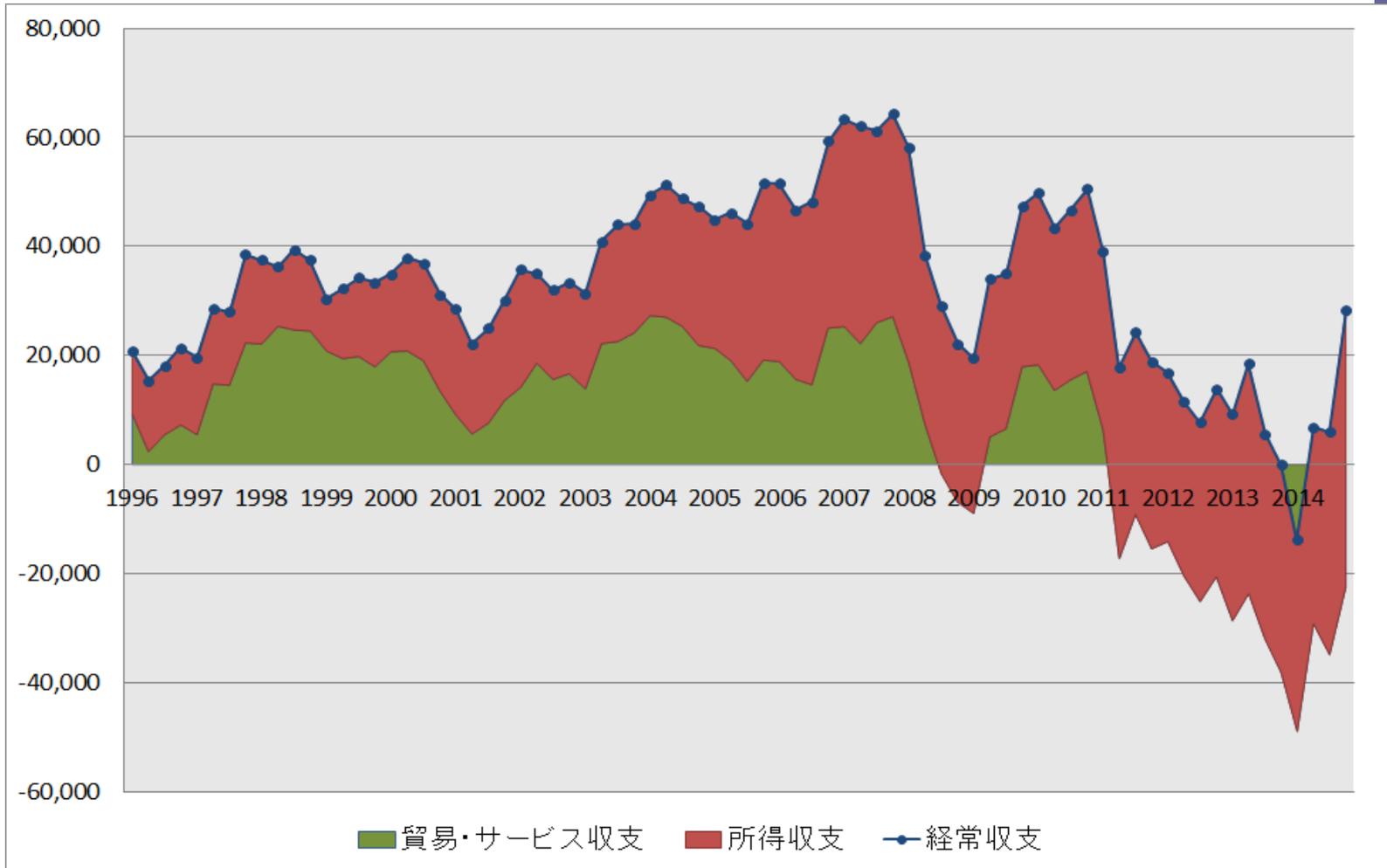
一橋大学経済研究所教授
RIETI ファカルティフェロー



1. 日本の経常収支の動向

+ 日本の経常収支の動向

1996年－2014年：四半期データ(季調済, 億円)





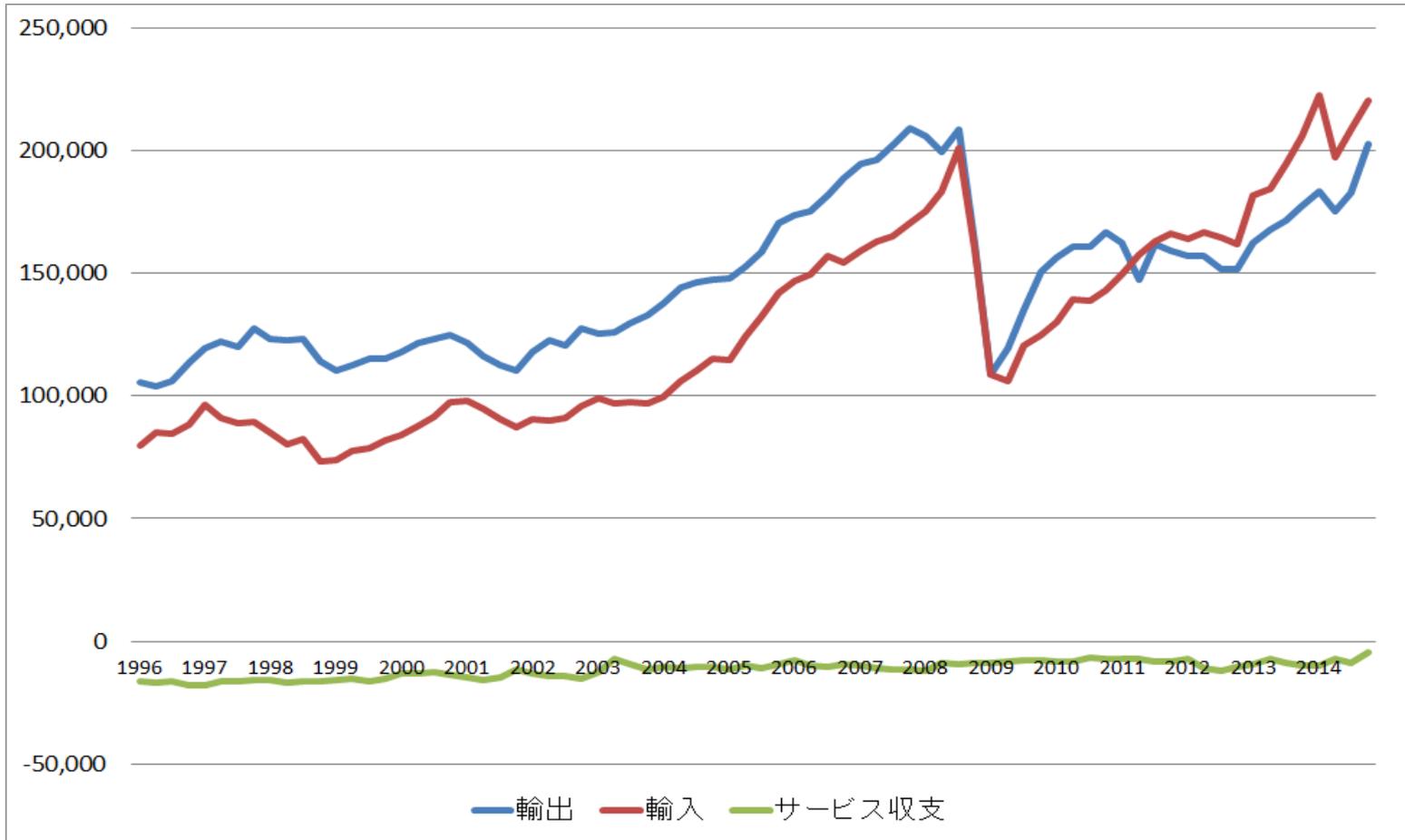
経常収支の黒字幅の減少と 貿易収支赤字の定着化



- 貿易収支は既に赤字化している
 - 契機となったのは、2008年秋のリーマン・ショック後の世界的不況
 - 2011年以降は赤字が定着
- 所得収支はむしろ黒字幅が拡大
 - しかし貿易赤字の拡大を十分に補うほどには増えていない。
- 貿易収支は2014年第1四半期に最大の貿易収支赤字。第2四半期以降は赤字は減少
 - 消費税率引上げ前の駆け込みで需要で輸入が一時的に増加？
 - 黒田バズーカ#2で円安がやっと浸透し始めた？

+ 輸出と輸入の動き

(単位: 億円)

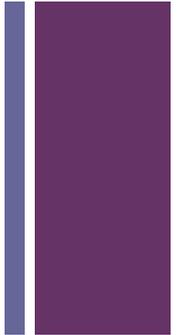
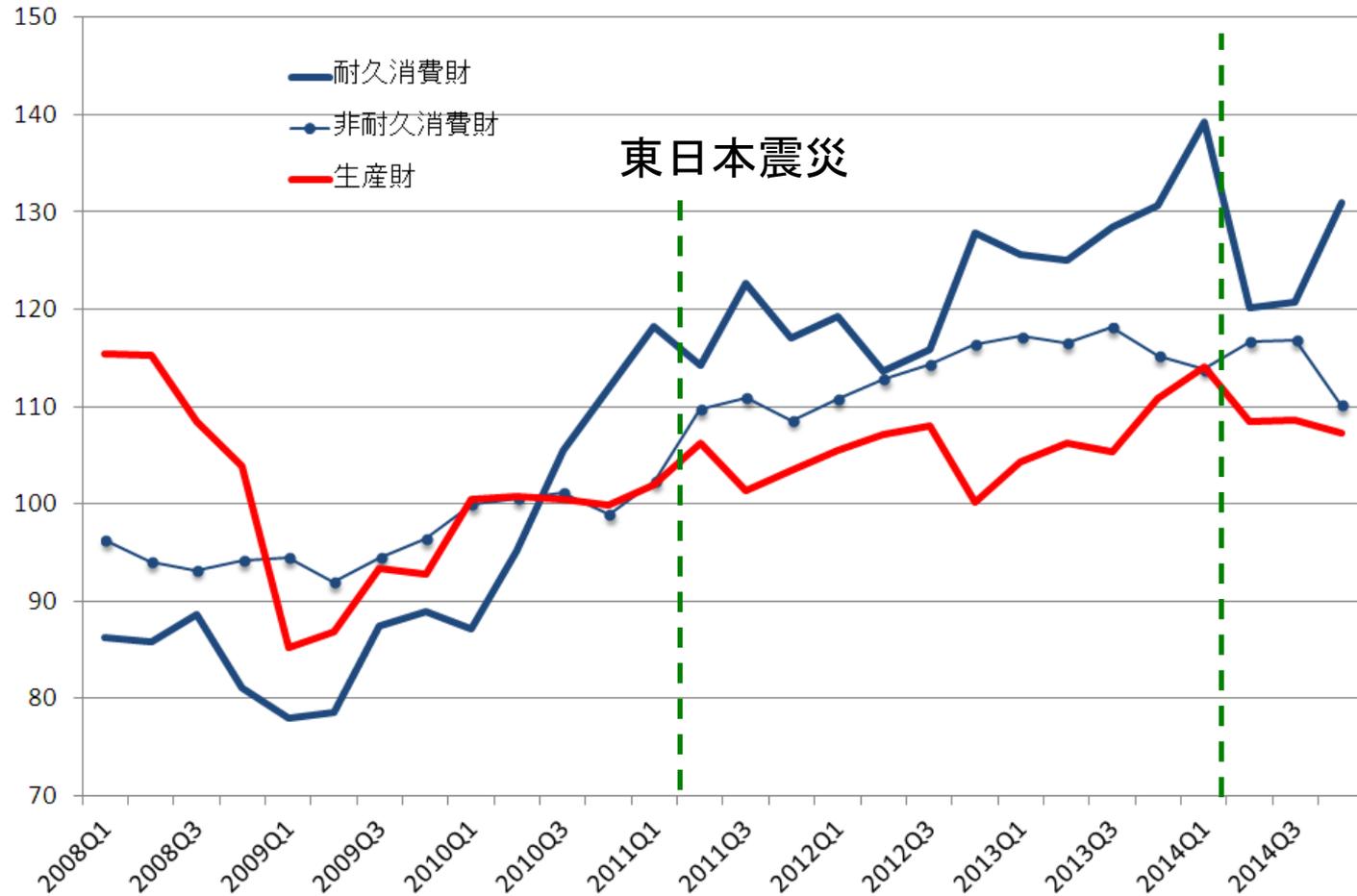




財輸入の変動状況: 2008-2014

データ: 鉱工業総供給表、2010年=100

消費税引き上げ





日本経済の貿易依存度の上昇

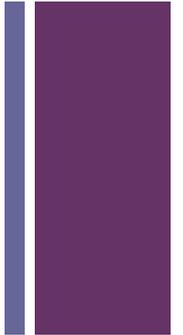


- 2000年代以降，日本の貿易依存度は大きく上昇.
- リーマン・ショック後に急激に低下するが，2013年後半までに元の水準を回復し，その後も上昇中.
 - ただし東日本大震災がなければ，特に輸出はもっと順調に回復していたかもしれない.
- なぜか？
 - 弱い国内需要？
 - グローバル化？
 - 東アジアの生産ネットワークに組み込まれた日本経済



世界的な貿易の「大収縮」

景気の高から谷への落ち込み, 2008-2009



	景気の谷 の日付	財輸出 (累積変化率)	鉱工業生産 (累積変化率)
世界全体	2009年5月	△25%	△ 13%
先進工業国	2009年5月	△ 24%	△ 17%
米国	2009年5月	△ 23%	△ 14%
日本	2009年6月	△ 22%	△ 36%
エマージング	2009年1月	△ 28%	△ 9%

from Baldwin and Taglioni “The great trade collapse and trade imbalances,” in Richard Baldwin ed., *The Great Trade Collapse: Causes, Consequences and Prospects*, A VoxEU.org Publication, 2010.

+ 世界貿易の「大収縮 great trade collapse」の日本への影響

- 貿易の「収縮」の大きさは他国と変わらなかったが、日本の景気は劇的に悪化.
- 日本の輸出品構成の問題
 - 需要ショックは、比較的狭い範囲の耐久消費財や投資財などの、需要が先送り可能な財に集中していた.
 - これらの財の需要は急激に減少し、それに伴い、生産に用いられる中間財需要も大きく減少した（生産ネットワークの国際化）
 - そのような財は日本の主要な輸出財だった
 - Fukao & Yuan (2009)など
 - 日本企業による過度な調整: 塩路・内野 (2011)

+

2. 経常収支の長期的な動向



経常収支の赤字化は起るのか？

短期的な視点

- 需要要因の重要性

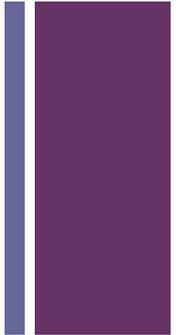
リーマン・ショックに端を発する世界不況以降、海外需要、特に欧米の日本の輸出財への需要が大きく低迷。

- 日本企業の生産拠点の海外への移転

- アベノミクス開始以降の円安の効果

- 生産拠点の変更には大きな固定費用がかかるので、日本回帰にはある程度大きな為替レートの変化が、一定期間続く(という企業の予想)が必要。

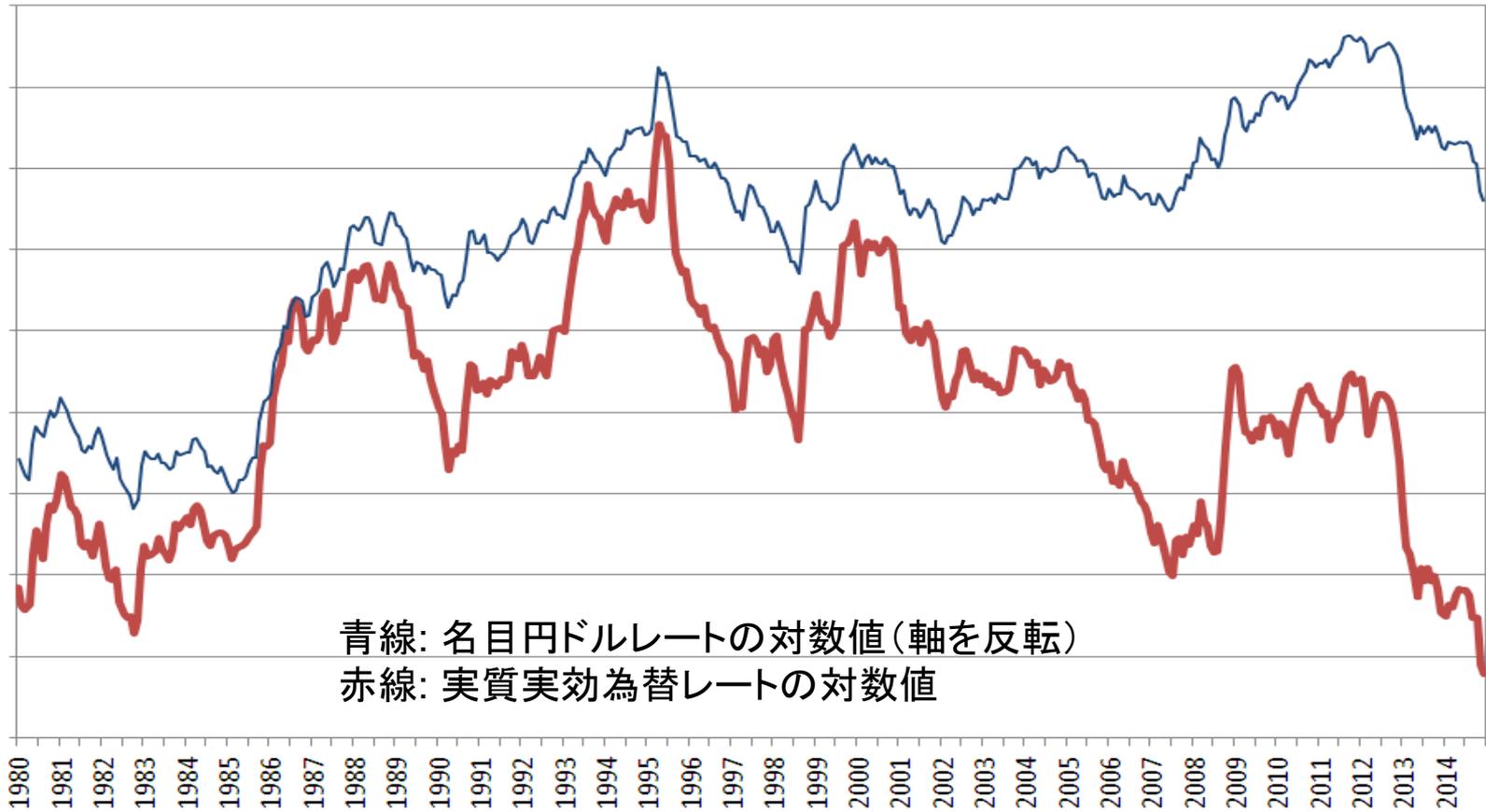
- 東日本大震災の影響？



+ 3. 輸出の変動をどうやって
説明するか？



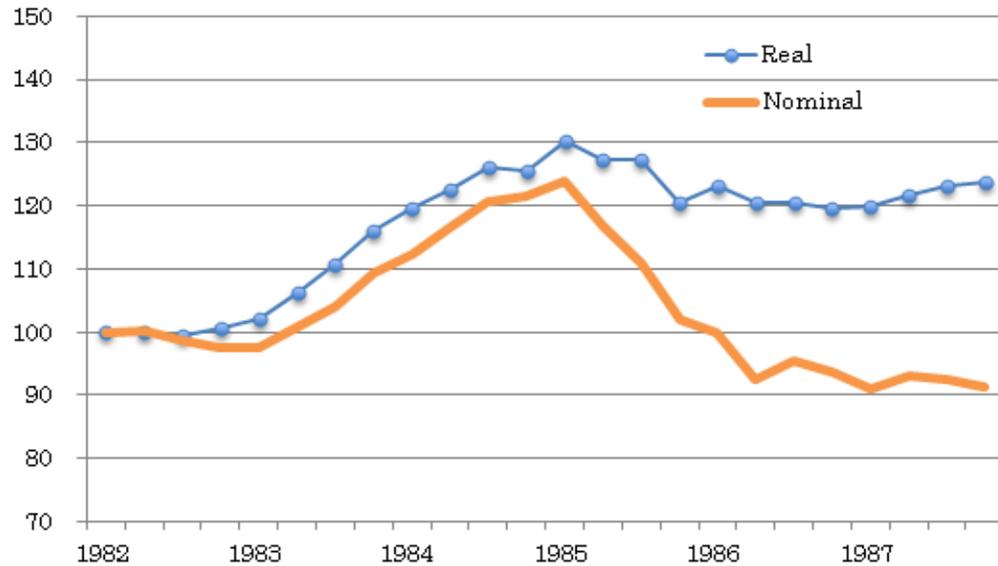
1980年-2014年の為替レートの変動





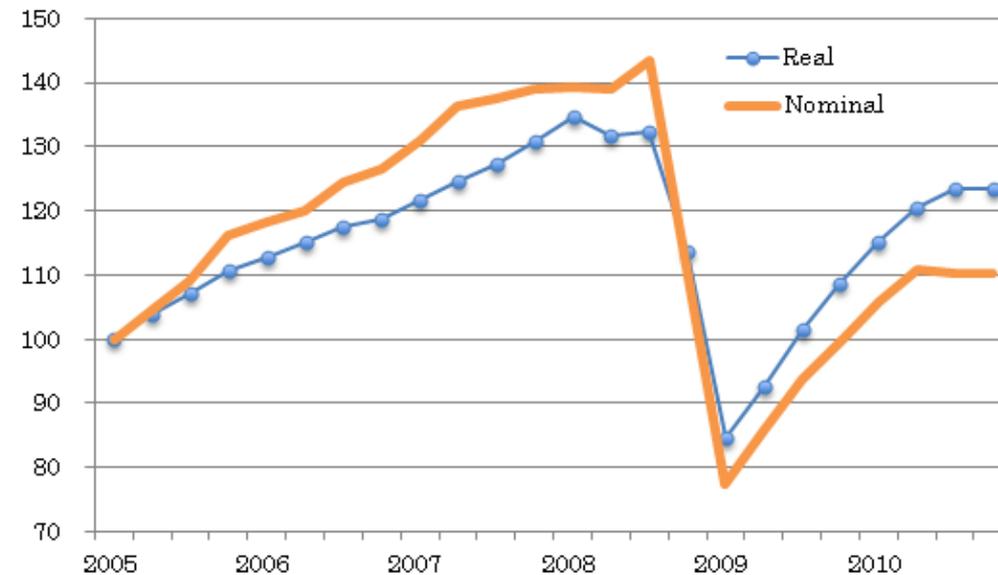
名目輸出と 実質輸出の動き

プラザ合意
(1985年9月)前後



リーマン・ショック
(2008年9月)前後

季節調整済みの四半期GDPデータ
(2005年基準). 1982年第1四半期,
2005年第1四半期をそれぞれ100とし
て基準化した値.



+ VARモデルによる分析

■ 3変数VAR

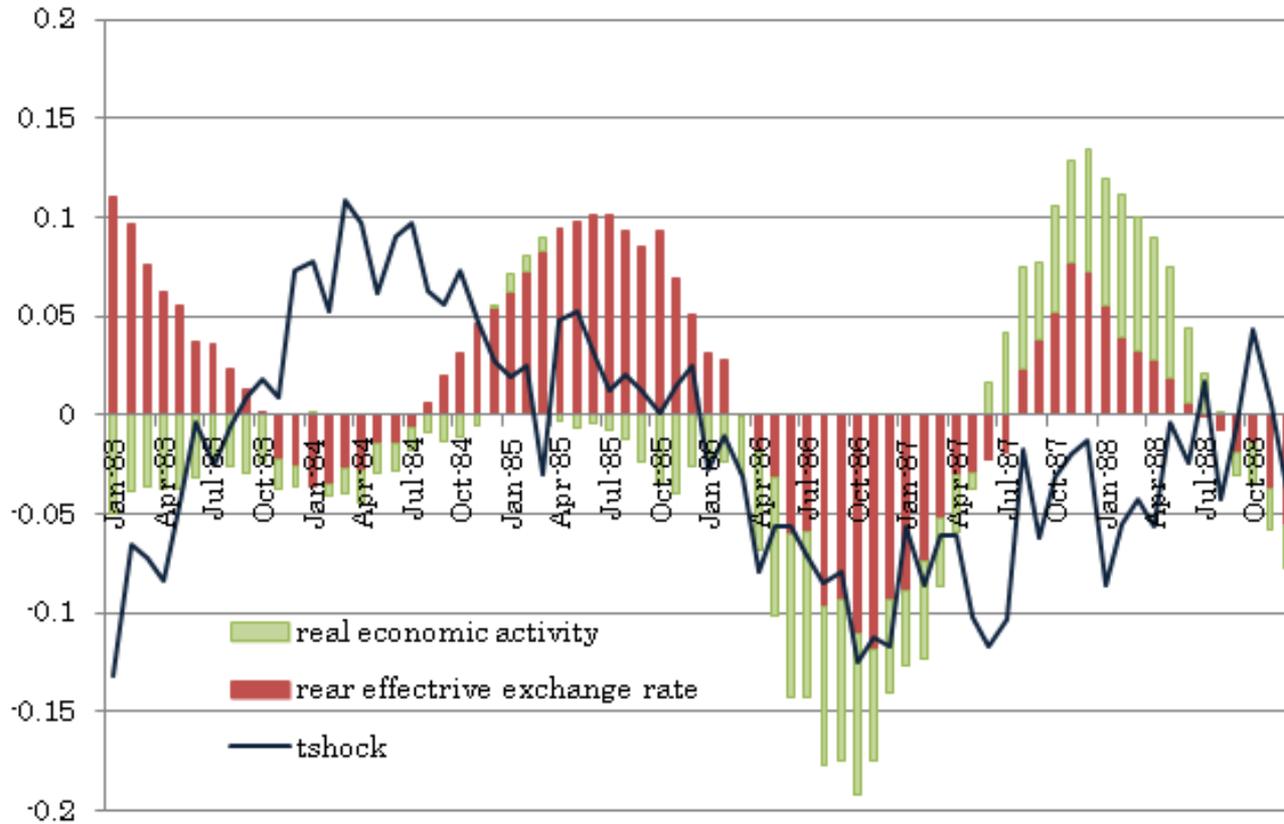
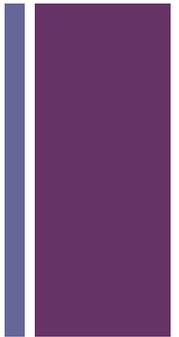
- 為替レート（実質実効為替レート）
- 世界経済の実物面の活動（海運貨物運賃データから作った指数）
- 実質輸出

■ 輸出の変動に占める為替ショックと海外需要ショックの割合

	需要ショック	為替ショック	その他
1975-99	15.5	23.3	61.2
2000-11	69.5	9.4	21.0

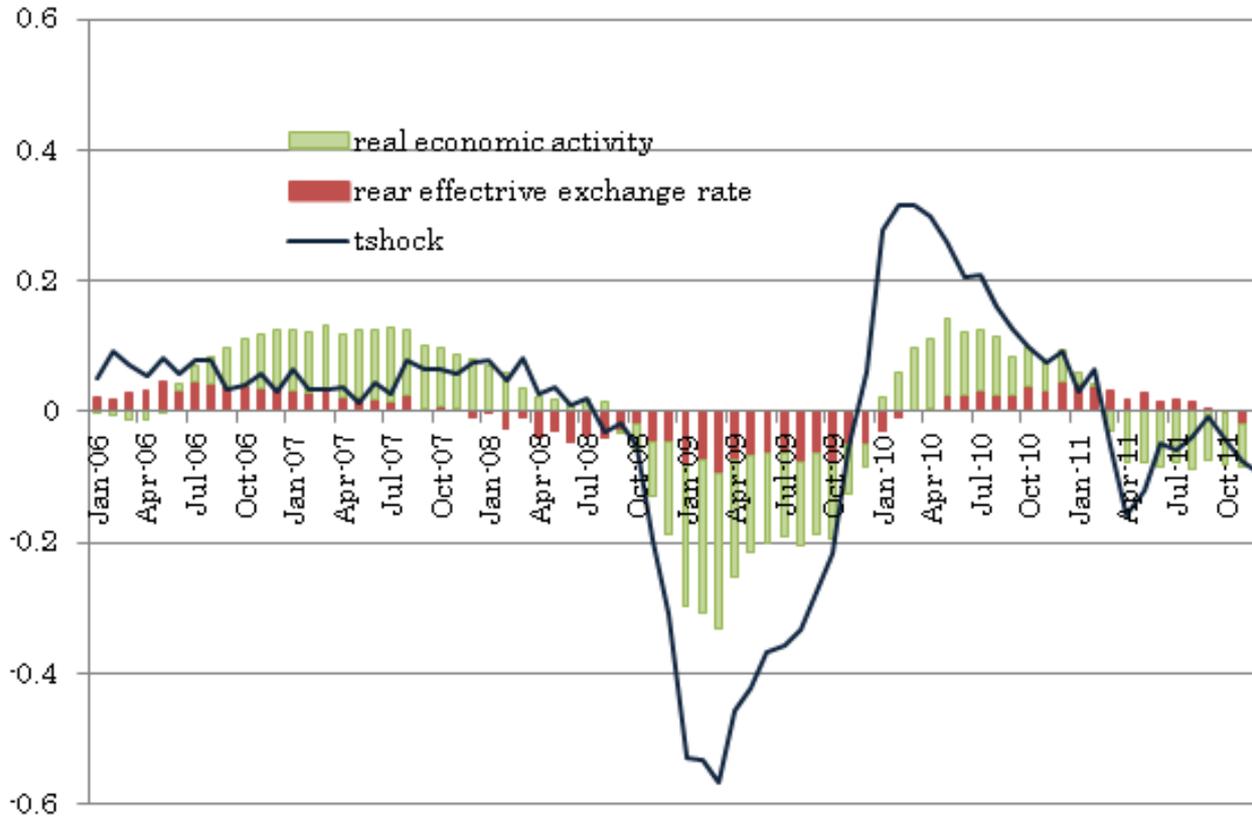
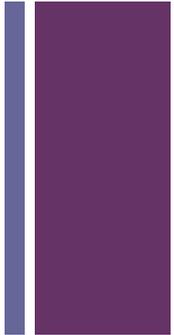


輸出変動の歴史的分解(historical decomposition): 1983-1988





輸出変動の歴史的分解(historical decomposition): 2006-2011



+ VARによる実証の結果

- 輸出変動を説明する要因として、1980・90年代に比べ、2000年代以降は需要ショック(世界景気)の影響が大きく、為替レートショックの影響が小さい。
- 1985年のプラザ合意後の円高と、2008年のリーマン・ショック後の円高を比べても、後者の方が需要ショックの影響が大きい。
- 2008年以降の輸出の変動には、説明のつかない部分が相対的に多くなっている。

+ 全体のまとめ

- 長期的には貿易収支赤字の拡大，経常収支黒字の減少・赤字化は避けられないが，短期的にはまだいろいろな要因を考慮する必要
- なぜ円安が輸出増加・経常収支の改善につながらないか？
 - 日本企業の生産拠点の海外移転
 - 世界景気の低迷
 - 消費増税による一時的な輸入増
- 需要ショック(世界景気)の重要性
 - 2000年代前半から中盤は，日本以外の景気が圧倒的に良かった。
 - リーマン・ショック後，特に欧州はまだ景気が十分回復していない。
 - 米国は本格的に景気が回復しつつあるが，中国経済は減速が顕著